

蒜山には、郷原漆器という一種のアートが存在する。郷原漆器は、完成品において木目の自然の美しさを保持し、目立たせるための、削り方、漆の塗り方に大きな特徴がある。

蒜山における漆器生産の歴史は、およそ600年前に遡る。今日ここで製造される特色ある製品とは異なり、このエリアの過去の漆器は、透過性の低い黒や赤の仕上げを施したものであり、他の地方の漆器に類似していた。しかし、塗装が比較的薄く、使用する漆の量が少ないため、他の地方で生産される漆器と比べ安価であった。そのため、蒜山の漆器は、大山とその周辺地域を旅する者にとって、手頃なお土産になっていた。

この工芸が人気の絶頂を迎えた江戸時代（1603～1867年）には、毎年、およそ400,000個の漆器が蒜山で生産されていた。しかし、1世紀足らず後には、地域の漆器生産は、第二次世界大戦によりほぼ消滅した。戦後の経済状況の悪化による贅沢品の需要減少に加え、必要な技能を持った多くの職人が戦死したのである。材料、特に漆は、戦時において、船体の保護など、軍事目的に使用されることも多く、欠乏していた。

数十年間、漆器は作られなかった。その後、蒜山の職人は、既存のサンプルと書物の情報を基に工程を再構築し、1980年代に、この工芸を復活させた。彼らは、現代的でありながら、その伝統や地域性にも忠実な漆器を作りたいと望んだ。現代の生まれ変わった漆器と古来の伝統とを結びつけるべく、今日の職人は、過去に用いたのと同じ材料を探し続けている。また、彼らは、この伝統の未来を守るため、漆の木を植えたり、教育支援活動に励んだりしている。

1つの郷原漆器に使われるすべての材料は、蒜山で生産されている。木材は、周囲の山で生育するヤマグリのものである。一般に、従来の赤と黒の漆器の生産に用いる木材は、縦方向に切断される。この方法では、多くの基材を得ることができる一方で、木目の模様の趣を犠牲にすることになる。木材は、どのみち顔料でコーティングするため、効率性に重きが置かれる。しかし、郷原漆器の製造では、幹は横方向、円盤状に切断される。これにより、一本の木から得られる基材の数や、完成品が取り得るサイズは制限されるが、年輪の美しさは、無傷の状態で残される。蒜山の職人は、漆塗りの際、これらの見事な同心円を存分に表現する。

基材の円盤は、職人が作る彫刻刀を用いて、ボウル、皿などの物品に彫刻される。円形の断片を削り出すには、轆轤を使用する。それぞれの断片には、紙やすりをかけた後で、漆の基層を塗布し、その後乾燥させる。

漆は、漆の木（ウルシ）から採取した樹液である。樹皮に切り込みを入れたのち、しみ出す樹液数百ミリリットルを丹精込めて採集、処理する。樹液の天然の色合いは、深い赤茶色である。標準的な漆器の輝く深紅色と漆黒の仕上げは顔料を加えたものである。蒜山で見られる漆の樹液は、特に

高い濃度のウルシオール（漆を硬化させる化合物）を含有している。これは、郷原漆器の深い光沢と優れた耐久性の元になっている。

漆の基層が乾いた後、それぞれの断片は、研磨用シリカを多量に含む、同じく地元由来の珪藻土でやすり掛けされる。このバフ研磨により、続く漆の層を基部に上手く付着させ、製品を、剥げにくい、強固なものにすることができる。

上から漆の層を塗布し、特別な調湿チャンバーでの乾燥に取り掛かる。これらの工程を、望ましい色の深みが得られるまで、繰り返す。固着しきっていない漆が滲んだり、ほこりなどのごみでその素晴らしい仕上がりが損なわれたりすることが無いよう、この長い工程を管理するには、熟練の技術が必要である。乾燥過程は、時間、温度、湿度の絶妙のバランスを必要とするため、高い眼識が求められる。

郷原漆器は、使えば使うほど、輝きを増す。それぞれの器は、実際に使われる中で、至高の美しさを獲得するであろう。そして、蒜山の職人は、作品が持ち主の日常に溶け込み、その生活を彩ってほしいと、望みを語る。